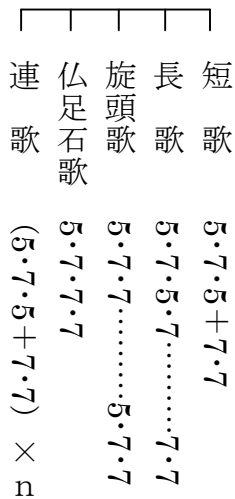


一・日本の詩歌

一―一・万葉集



一―二・連歌



一―三・正風連歌

飯尾宗祇 (1421～1502) は娯樂的に墮した連歌を幽玄な芸術に高めようと正風連歌を提唱し、「新撰菟玖波集」を編む。

雪ながらやまもとかすむ夕かな (発句) 宗祇

行水遠く梅にほふさと (脇句) 肖柏

河かぜに一むらやなぎはるみえて (第三〓平句) 宗長

舟さすおともしるきあけかた (第四〓平句) 宗祇

……………

(最終行〓挙句)

一―四・俳諧連歌

十六世紀になると、規則が煩雑になった正風連歌に対し、俗っぽい口語、自由奔放な滑稽味を加えた俳諧の連歌が広く流布した。

一―五・前句付けの誕生

連歌では前の句に次の句の「得も言われぬ」付け方が要求される。

そこで適当な題句 (5・7・5 または 7・7) を出して、それに付ける練習をする。それが面白い、ということ。 「前句付け」として独立した文芸に発展した。そのなかでもなぞなぞ問答形式のものもてはやされた。

「竹馬狂吟集」(1499) (傍点は前掲「新撰菟玖波集」の揶揄)

・折る人の手にくらひつけ犬ざくら

・かへるなよ我がびんぼふの神無月

つぶるるもありつぶれぬもあり

・秋風に木ずえの熟柿また落ちて

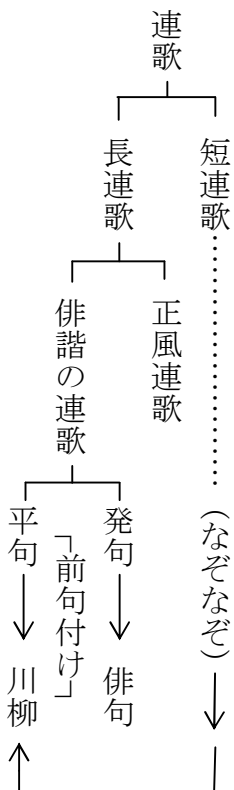
おそれながらも入れてこそみれ

・我が足や手洗の水の月のかげ

「新撰犬筑波集」(1539)・山崎宗鑑(傍点は前掲「新撰菟玖波集」の擲揄)

- ・月に柄をさしたらばよきうちはかな
- ・ぬす人をとらへてみればわが子なり
- ・さやかなる月を隠せる花の枝

切りたくもあり切りたくもなし



## 二 江戸時代 — 俳句と川柳の誕生

松尾芭蕉(1644～1694)は、俳諧連歌の発句の質を追求し、その独立性を高め、新たな境地を開いて俳句として完成した。しかし当時は俳句とは呼ばれず、俳諧あるいは発句と呼ばれていた。

他方、庶民の間では、前句付けが人気を博し、さまざまな経緯を経て興業化され、

「万句合興業」と呼ばれた。その仕組みは(3回/月開催)

- (1) 点者が課題の「前句」を示し、「付け句」を募集する。広告。
- (2) 応募者は、規定の料金を添えて指定の場所に持参。取次ぎを経て点者へ。
- (3) 点者は作品を選考し、入選句を印刷物(勝句刷り)にして発表。入選者には賞品を出す。
- (4) 点者は、応募者の料金から、取次への手数料、印刷代、賞品代を引き儲け。

### 二一 柄井川柳(1718～1790) 本名 柄井八衛門正通、俳名「川柳」。

浅草新掘端・龍宝寺門前三代目名主。三十四歳で万句合興業の点者を始め、没するまで圧倒的な人気を博し、代表的な点者にのし上がる。彼の選んだ前句付を「川柳評」「川柳点」などと言い、これが前句付の代名詞のように使われ、やがて「川柳」と呼ばれるようになった。

### 二二 「誹風柳多留」(1765)(呉陵軒可有編)(以後167篇まで引き継がれる。)

「川柳評」の勝句刷りから、十七音の独立した句として意味のわかるものを編集。

- ・かみなりをまねて腹掛やつとさせ
  - ・神代にもだます工面は酒が入
  - ・道問へば一度にうごく田植笠
  - ・ひん抜いた大根で道をおしへられ
  - ・寝て居ても団扇のうごく親心
  - ・本降りに成て出て行雨やどり
  - ・母親はもつたいないがだましよい
  - ・碁敵は憎さも憎しなつかしさ
  - ・泣き泣きもよい方をとるかたみわけ
  - ・孝行のしたい時分に親はなし
- こはい事かなこはい事かな  
手伝ひにけり手伝ひにけり  
ていねいな事ていねいな事  
馬鹿な事かな馬鹿な事かな  
座りこそすれ座りこそすれ
- .....  
.....  
.....

## 二―三 安政の改革

五世川柳を襲名した水谷金蔵は、安政の改革のあおりを受け、二つの規範を示した。

(1) 「柳風式法」 判者（選者）の心得

1. 政事に関わりたる儀は選ぶまじきこと。
  2. 句選の規則は、天朝を尊敬し、敬神愛国を旨とし・・・
  3. 句選は、依怙これなく、風流専一にすべきこと。
- .....

(2) 「句案十体」 作句における十種類のすがた・かたちを示した。

- 正体・反覆・比喩・半比・虚実・隠語・見立・陰題・本末・字響
1. 正体とは、趣向を工（たく）まず、其俣の体を句作する。
  2. 反覆とは、尊卑、上下、大小、黒白など反転して詠む。
  3. 比喩とは、物に譬へて教訓なす句体。
- .....

## 三 明治く大正時代の川柳

正岡子規による俳句の革新運動にも刺激され、江戸末期の前句付（柳風狂句）の墮落した状態を改革すべく、改革の旗手が現れ、新川柳が提唱された。

### 川柳改革者―新川柳の誕生

(1) 窪田而笑子（1866～1928）松山出身。横濱電信局技師。俳句の宗匠から川柳に転

向し、読売新聞柳壇選者として指導的役割を果たす。上品・軽快・山手風

- ・バラックへ震災前のツケが来る
- ・生酔のよろける方に女あり
- ・盆栽の様には嫁をいたはらず
- ・持駒を聞いてそれから二三服
- ・探し物探さぬ物を見つけたり

(2) 阪井久良伎（1869～1945）横浜生まれ、十二歳で東京移住。東京高等師範国文科卒。

三十五歳で電報新聞に川柳欄を開設。後に新聞「日本」記者となり同新聞社の主

筆 正岡子規の俳句改新の情熱に刺激され川柳改革へ。江戸趣味・渋味・下町風。

- ・床の間にあるが恩賜の義足也
- ・オイコラがモシモシになる世の進み
- ・故郷忘れ難く焼野原へ戻り
- ・焼土の下から芽ぐむ江戸の春
- ・衆議員拳固の雨のふるところ

(3) 井上剣花坊（1870～1934）父は長州藩士。零落。十五歳で小学校の代用教員となる。

1903 新聞「日本」に入社。「柳樽寺社」を結成。言葉遊びや低俗な笑いに堕した狂句を批判し、古川柳の精神に還れと川柳の近代化を宣言した。山口県で覇気のある人を「喧嘩ぼう」と言うことから俳名をとった。滑稽・豪放・書生風。

- ・蔭膳の主は草むす屍なり
- ・咳一ツ聞こえぬ中を天皇旗
- ・国難に先立ち生活難が来る
- ・日めくりを剥がずに居ても日は進む
- ・あの船のどれにも帰る港あり

- (4) 吉川雉子郎 (1892～1962 70歳) 神奈川県久良岐群に生まれる。一一歳の時、家が没落し、尋常小学校をやめ丁稚奉公に出され、母や家族を支えるため生活の辛苦を嘗める。一八歳の時上京し、二〇歳で投句から剣花坊を知る。機関紙「大正川柳」編集幹事となり、川上三太郎らと黄金期を作る。関東大震災を機に川柳を離れ、文豪への道を進む。

- ・ ことが君か素焼きの壺に骨の軽さ
- ・ 貧しさも余りの果は笑ひ合ひ
- ・ よく見れば春で無い人春の人
- ・ 蛸かご心配そうな光りかた
- ・ 寄席へ来て寄席芸人の身を案じ
- ・ いもと弟連れてさびしい兄の顔
- ・ お母さんと呼んで見し用もなければ
- ・ 思はれもする柩の中の静けさ
- ・ 菊根分けあとは自分の土に咲け
- ・ この先を考えている豆のつる

#### 四. 新川柳その後 — 大正から昭和・戦中の川柳

##### 四―一. 女流作家

川柳は男性中心に発展してきたが、次第に女性にも波及し始めた。

- (1) 井上信子 (1869～1958 88歳) 剣花坊夫人、新川柳から新興川柳へと改革をめざした夫に内助の功を尽くす。四十六歳頃から活躍、柳樽寺派の全盛期を支え、多くの門下生に慕われた。

- ・ とぼとぼと行く母に子はついて来る
- ・ 男ならかういふ時に酔ふだろう
- ・ どう座り直してみてもわが家
- ・ 座布団に似し運命を女持ち
- ・ 空襲の上は涼しい星の空
- ・ 戦死する敵にも親も子もあらう
- ・ 一人去り
- ・ 二人去り
- ・ 佛と二人 (剣花坊追悼)
- ・ 国境を知らぬ草の実こぼれ合ひ

- (2) 三笠しづ子 (1882～1932 50歳) 弁護士・丸山長渡氏夫人。四十一歳の時、柳樽寺川柳会に紹介され、関東大震災で避難中の剣花坊夫妻と初対面。女性一人で孤独だった信子夫人は、聡明で美人のしづ子を妹のように可愛がった。

- ・ この邊が心と思ふ胸を抱き
- ・ どんな明日が待つて居ようと男の世
- ・ ちゃんとして待つ日は誰も来やしない
- ・ 床しさに胸の扉がそつとあき
- ・ 拭はるゝ涙をもって逢ひに行く

## 四―二 結社の誕生

(1) 番傘 大阪に本拠をもつ、現在も日本最大会派の一つ。

西田當百 (1871～1944 73歳) 「番傘」の創設者。福井県小浜町生まれ。小学校卒業後、職を転々としたが二八歳で大阪毎日新聞社に勤務。三五歳で川柳。

- ・ 大切に神馬虐待されて居り
- ・ 又しても紋が合ふとて借りられる
- ・ 上爛屋ヘイヘイヘイと逆らはず
- ・ カフェーへ来ると番頭僕といひ
- ・ 工場から悪魔の息のやうに吐き

(2) きやり吟社 村田周魚(川柳六大家の一人)が大正九年関東に創立。○丸らを迎えて「川柳きやり」を創刊。五年後には全国を代表する柳誌に発展した。

西島○丸(れいがん) (1883～1958 75歳) 東京深川霊岸町の生れ。西念寺住職。俳句・短歌・川柳・冠句・都々逸の万能選手、川柳に落ち着く。多作家。

- ・ 転んでも起きて我家ありがたし
- ・ 嬉しさは五本の指が五本あり
- ・ 貧しさは鮭一ト切れを奢りとす
- ・ 兄弟子の箸を羨むチャンコ鍋
- ・ 秋の灯の貧しい膳へ黙りがち

(3) プロレタリア派

鶴 彬 (1909～1924 29歳) 石川県河北郡生まれ、高等小学校卒。貧窮のなか、マルクス主義を信奉し、剣花坊及び信子夫人の庇護を受けた。投獄・拷問死。

- ・ 手と足をもいだ丸太にしてかへし
- ・ 屍のぬないニュース映画で勇ましい
- ・ 一粒も穫れぬに年貢の五割引
- ・ ざん壕で読む妹を賣る手紙
- ・ 高粱の実りへ戦車と靴の鉾

## 五 昭和戦中・戦後の川柳

五―一 六大家 昭和の中期、川柳界の指導的地位にあつた六人

(1) 麻生路郎 (1881～1965 76歳) 尾道市生まれ。大阪高商卒。新聞記者、病院事務長等種々の職を経、55歳で川柳職業人を宣言。「なにわ文芸賞」受賞。

- ・ 俺に似よ俺に似るなと子を思ひ
- ・ 寝転べば畳一帖ふさぐのみ
- ・ 余所の奥さんを鑑賞してらうちに着き
- ・ 子を死なし学校に子の多いこと
- ・ 振り向けばやっぱりついて来る妻よ

(2) 川上三太郎 (1891～1968 77歳) 東京下町生まれ。十二歳より川柳に親しむ。

昭和十六年 日本川柳協会結成。昭和二五年(59歳)よみうり新聞の時事川柳欄開設、生涯選者を務める。新らしいユーモアの復活を期す。

- ・ 良妻で賢母で女史で家に居ず

- ・お辞儀して返してもらふ貸した金
- ・孝行は真似でもやはり金が要り
- ・女の子タオルを絞るように拗ね
- ・われは一匹狼なれば痩身なり

(3) 村田周魚 (1889～1967 78歳) 東京下谷区生まれ。東京薬学校卒、警視庁衛生部に勤務。父は俳諧師。大正九年 きやり吟社を創立。自分の日録。平明。

- ・二合では多いと二合飲んで寝る
- ・神様も笑ふかと聞く子の瞳
- ・大晦日こんど机をこう置こう
- ・老いてな お戀知る人の倅せな
- ・掌の筋に運があるとは面白し

(4) 楳本紋太 (1890～1970 79歳) 神戸市生まれ。十四歳で父を失い、尋常高等小学校中退。丁稚奉公を経て菓子商甘源堂主人。

- ・大笑いした夜やつぱり一人寝る
- ・知ってるかあははと手品やめにする
- ・癌の記事いま読んでまだ喫うている
- ・弔電を打って体操してるわれ
- ・酒のむも飲まぬも長寿変りなし

(5) 岸本水府 (1892～1965 73歳) 三重県鳥羽生まれ。大阪成器商業卒。種々の職業を経て川柳職業人となる。當百の後を継いで「番傘」を創刊・主宰。

- ・恋せよと薄桃いろの花がさく
- ・ぬぎすててうちが一番よいといふ
- ・世話ばかりやいて写真の隅にいる
- ・景観は雄大にしてバスが落ち
- ・今にしておもへば母の手内職

(6) 前田雀郎 (1897～1960 62歳) 宇都宮市生まれ。宇都宮市立商業学校在学中から川柳を始める。卒業後都新聞社(現東京新聞)の都柳壇の選者となる。

- ・妻にけなされて本当の値が言えず
- ・酒飲みに見るにも酒が要り
- ・日本語で言えぬところが新しい
- ・これも贖物と遺族へ無慈悲なり
- ・夢のなか古さと人は老いもせず

## 五―二. 女流作家

(1) 麻生葎乃 (1893～1981 89歳) 堺市の生れ。プール女学院英語専修科卒。父に連れられて「番傘」句会に参加して麻生路郎に見染められた。

- ・飲んでほし やめても欲しい酒をつぎ
- ・数の子のみんな育てばすごかろう
- ・浴槽へずらり立ったは皆わが子
- ・こおろぎよ私も蚊帳で起きてゐる
- ・墓に水かけに

海越え山を越え

(子の一周忌)

(2) 時実新子 (1929～2007 78歳) 岡山市の生れ。県立岡山西大寺高等女学校卒。

短歌の老師から「あんたのように死ぬの生きるのと血を吐くときは歌の本道ではない」と破門され、川柳を選んだ。川上三太郎に師事。三十四歳で初の句集「新子」を自費出版で五百冊上梓し、二か月で完売。無名の作家が、ぬるま湯の川柳界に一石を投じた。五十八歳の句集「有夫恋」がベストセラー。

- ・妻をころしてゆらりゆらりと訪ね来よ
- ・花火の群れの幾人が死を考える
- ・死に顔の美しさなど何としよう
- ・凶暴な愛が欲しいの煙突よ
- ・自画像を血で描く母を子よいつか

## 六. 川柳と俳句

・潜在意識として「川柳は俳句より下位の文芸である」という感覚がある。

連歌の発句 (大将の位) ↓ 有 有 文語体 風景画

⇔ 【季語】 【切れ字】

連歌の平句 (兵卒の位) ↓ 無 無 口語体 人物画

「(俳句) 朝がほやつるべとられてもらひ水 千代女

(川柳) 朝顔に釣瓶とられてもらひ水 千代女

小寺 勇 (1915～1994 79歳)

- ・きまり文句の「ぼちぼちだんな」十二月
- ・熱があるいうたらでぼちんもてくる妻
- ・ショート・パンツがようてステテコはなんでやねん
- ・蚊に覚めてほべたでぼちんめくら打
- ・熱いうどんで呑むうどんやの風邪薬

「(俳句) 滝の上に水あらはれて落ちにけり 後藤夜半

(川柳) なんぼでもあるぞと滝の水は落ち 前田伍健

## 七. 川柳百花繚乱 —— 二極化

(1) サラリーマン川柳

- ・エコ！エコ！と単なるケチを正当化
- ・定年で上司と妻が入れ替わる
- ・耐えてきたそう言う妻に耐えてきた
- ・日は射すが光は射さぬ窓の席
- ・善悪を知らぬ大人が子を育て
- ・このオレにあたたかいは便座だけ
- ・犬はいい崖つぶちでも助けられ
- ・肩書が取れて背中も丸くなり
- ・講演会よく寝た人ほど拍手する
- ・窓際も外から見れば窓の内

(2) シルバー川柳

- ・欲しかった自由と時間持て余す
- ・お医者様パソコン見ずにオレを診て

- ・来世も一緒になろうと犬に言い
- ・あの世ではお友達よと妻が言い
- ・目も耳も悪くなつたが勘は冴え
- ・美しく老いよと無理なことを言う
- ・アイドルの還暦を見て老を知る
- ・どこで見る東京五輪天か地か
- ・元酒豪今はシラフで千鳥足
- ・新聞を電車で読むのはオレ一人

(3) 文芸川柳 (主に番傘より)

- ・葬式で会いぼろいことおまへんか 須崎豆秋
- ・生命線だけは易者にほめられる 松原秀河
- ・ええ人ほど早よ死にはるとぼくに言う 古下俊作
- ・被害者になることは無い時効の日 丸山貞春
- ・原子力さて人間よ何処へゆく 高木夢二郎
- ・子の希望聞いてやれない薪を割る 英 城
- ・偉い子はいぬがどの子も親思い 森 紫苑荘
- ・ようきいとときや妹ついでに叱られる 西尾 栞
- ・終着駅近付き棚の荷を下ろす 丸山貞春

八. まとめ

- ・川柳は何を詠んでいるか。(木津川 計著「人生としての川柳」引用句一部入替え)
- (1) 万人の願いを描く。 天下を論じ国家を論じ金が欲し 今川乱魚
- (2) 男女の愛を教える。 子を産まぬ約束で逢う雪しきり 森中恵美子
- (3) 嘆きを代弁する。 この広い世界に僕の職がない 泉 正太郎
- (4) 人間の暗部をさらす。 さりながら痴漢の心少し持ち 西尾 栞
- (5) 負の心情を詠む。 出世した仲間の話で座が沈み 岩谷政子
- (6) 人情の機微をうがつ。 中継ぎも打たれ先発ほっとする 満州生
- (7) 批判精神の短詩型 カラフルに国家が来ますピヒッピヒッ 渡邊隆夫
- (8) 時代をとらえる。 昔むかし赤紙という人さらい 矢部あき子
- (9) 人生とは何かを教える。 台本のない人生がすばらしい 細井辰二
- (10) 美しい情感のうた 星空を眺めて妻の馬車を待つ 高階秀峰

九. 蛇 足 (穴原明司 川柳句集「どこかで」より)

- ・行く雲に旅に出ようと誘われる
- ・掌にくるんで孫の手を洗う
- ・百八つ煩惱すべて異常なし
- ・呆けとりやせんあのそのあれが増えただけ
- ・一本の笛に出会った夏の午後
- ・擦り切れてときどきショートする絆
- ・デパ地下を澁刺泳ぐ妻を追う
- ・その先を寄り添い伸びる藤の蔓
- ・ほんとうに惜しまれてるか薄目あげ
- ・少年が僕のどこかでとんぼ捕り



【木曜懇話会】

川柳知ったかぶり

二〇十六・十一・十七

S三五年 織維修士

穴原明司

「紅生姜」

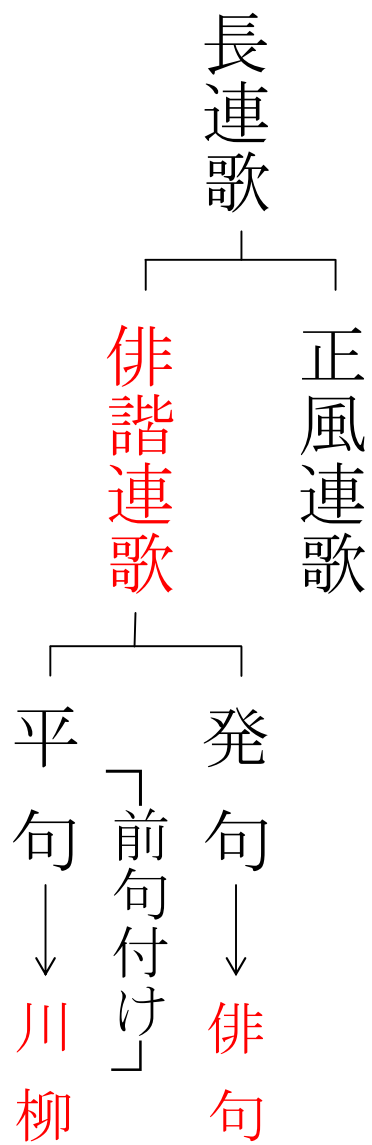
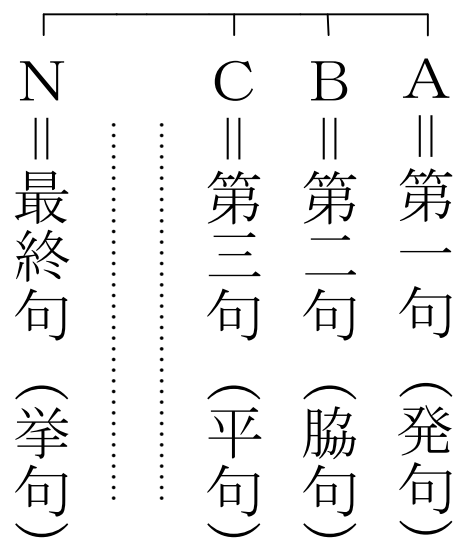
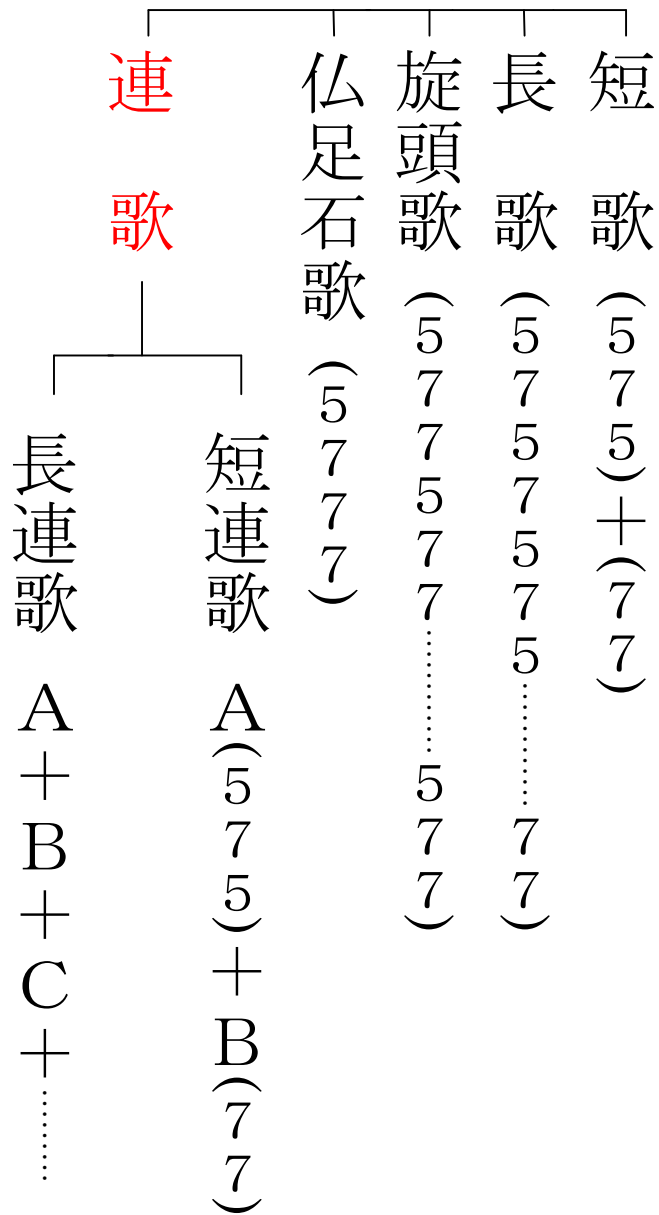
貧しさも

余りの果は

笑ひ合ひ

雉子郎

【万葉集】



【万葉集】

短歌 (5 7 5) + (7 7)

長歌 (5 7 5 7 5 7 5) …… 7 7

旋頭歌 (5 7 7 5 7 7) …… 5 7 7

仏足石歌 (5 7 7 7)

連歌

短連歌 A (5 7 5) + B (7 7)

長連歌 A + B + C + ……

A || 第一句 (発句)

B || 第二句 (脇句)

C || 第三句 (平句)

……

……

N || 最終句 (挙句)

長連歌

正風連歌

俳諧連歌

発句 ↓ 俳句

「前句付け」

平句 ↓ 川柳

## 「万句合興業」(毎月五日)

- (1) 「前句」に対する「付け句」を募集
- (2) 料金を添えて取次所へ持参
- (3) 点者は入選句を「勝句刷り」で発表
- (4) 点者は料金から経費を引いて儲け

柄井川柳 (1718～1790) の選んだ句は  
大人気で「川柳評」「川柳点」と呼ばれた。

彼の選んだ勝句刷りから、呉陵軒可有が  
一句独立して意味の分かる句を編集した。

### 「誹風柳多留」

柄井川柳の勝句刷りは二十四編まで。

その後引き継がれ、百六十七編まで続いた。

「誹風柳多留」 初篇

(初代柄井川柳選 吳陵軒可有編)

かみなりをまねて腹かけやつとさせ

神代にもだます工面は酒が入

道問へば一度にうごく田植笠

ひん抜いた大根で道をおしえられ

寝ていても団扇のうごく親心

本降りに成て出て行雨やどり

母親はもつたいないがだましよい

碁敵は憎さもにくしなつかしさ

女房と相談をして義理を欠き

役人の子はにぎにぎを能覚

雨やどり額の文字を能おぼえ

蓮根はここらを折れと生れ付

「誹風柳多留」 2 ～ 24篇

(初代柄井川柳選 吳陵軒可有編)

泣き泣きもよい方をとるかたみわけ

孝行のしたい時分に親はなし

役人の骨つぽいのは猪牙(ちよき)に乗せ

医者衆は辞世をほめて立たれたり

寝て解けば帯ほど長いものはなし

女湯へ起きた起きたと抱いて来る

うたた寝の顔へ一冊屋根に葺き

江戸者の生れそこない金をため

芭蕉翁ぼちやんといふと立留り

「誹風柳多留」 25編以降

二世川柳（初代の長子）

三世川柳（初代の五男）

四世川柳（東都誹風狂句元祖）

五世川柳（腥齋 佃↓柳風狂句）

堪忍の芸尽くしする三ツの猿 如雪

粉に挽て親にすゝむる年の豆 木卯

下駄の齒でかみゞて行すべり道 浜松雉子

年よりの耳ハ眼鏡の扣（ひか）へ杭 奴山人

蠅が来てからかつて居る猫の耳 舛丸

玄関番お里の使者と二番さし 古京

蠅を生捕んと土瓶はりたおし 上総米山

オホゝとアハゝ鶴鴿の尾に見とれ 柳泉



# 安政の改革

五世川柳の示した二つの規範

## (1) 「柳風式法」

判者（選者）の心得

1. 政事に関わりたる儀は選ぶまじきこと
2. 天朝を尊敬し、敬神愛国を旨とし……
3. 依怙これなく、風流専一に……

## (2) 「句案十体」

作句における十種類のすがた・かたち

正体・反覆・比喻・半比・虚実・隠語・

見立・陰題・本末・字響

1. 正体とは、趣向を工たくまず、そのまま
2. 反覆とは、尊卑、上下、大小、黒白  
など反転して詠む。
3. 比喻とは、物に譬へて教訓なす句体。

# 明治く大正の川柳

## 川柳改革者

正岡子規による俳句の革新運動に刺激

窪田而笑子 愛媛県松山市 横濱電信局技師

阪井久良伎 横濱 江戸趣味

井上劍花坊 山口県 長州藩士の子

吉川雉子郎 神奈川県 のちに大文豪



## 新川柳の誕生

大正く昭和戦前・戦中の川柳

### (1) 女流作家の誕生

井上信子 山口県 井上劍花坊の妻

三笠しづこ 東京都 弁護士夫人

### (2) 結社の誕生

番傘 〓 西田當百 福井県

きやり結社 〓 西島〇丸 東京深川靈丸町

(プロレタリア派) 〓 鶴彬 石川県 獄死

新川柳（明治三十年代）

川柳中興の祖

（1）窪田而笑子

バラックへ震災前のツケが来る  
生酔のよろける方に女あり  
盆栽の様には嫁をいたはず  
持駒を聞いてそれから二三服  
探し物探さぬ物を見つけたり

（2）阪井久良伎

床の間にあるが恩賜の義足也  
オイコラがモシモシになる世の進み  
故郷忘じ難く焼野原へ戻り  
焼土の下から芽ぐむ江戸の春（大震災）  
衆議員拳固の雨のふるところ

(3) 井上剣花坊

蔭膳の主は草むす屍なり

咳一つ聞こえぬ中を天皇旗

国難に先立ち生活難が来る

日めくりを剥がずに居ても日は進む

あの船のどれにも帰る港あり

社会鍋くらいで貧は救われず

得心をさせて涙を拭いてやり

(4) 吉川雉子郎

こが君か素焼きの壺に骨の軽さ

貧しさも余りの果は笑ひ合ひ

よく見れば春で無い人春の人

蛍かご心配そうな光りかた

寄席へ来て寄席芸人の身を案じ

いもと弟連れてさびしい兄の顔

お母さんと呼んで見し用もなければど

思はれもする柩の中の静けさ

菊根分けあとは自分の土に咲け

この先を考えている豆のつる

# 新川柳その後

女流作家

## (1) 井上信子

とぼとぼと行く母に子はついて来る

男ならかういふ時に酔ふだろう

どう座り直してみてもわが家

座布団に似し運命を女持ち

空襲の上は涼しい星の空

戦死する敵にも親も子もあらう

一人去り

二人去り

佛と二人

(剣花坊追悼)

国境を知らぬ草の実こぼれ合ひ

## (2) 三笠しづ子

この邊が心と思ふ胸を抱き

どんな明日が待つて居ようと男の世

ちやんとして待つ日は誰も来やしない

床しさに胸の扉がそつとあき

拭はるゝ涙をもつて逢ひに行く

## 西田當百「番傘」

大切に神馬虐待されて居り  
又しても紋が合ふとて借りられる  
上爛屋へイヘイヘいと逆らわず  
カフエーへ来ると番頭僕といひ  
工場から悪魔の息のように吐き

## 西島〇丸（れいがん）「きやり吟社」

転んでも起きてても我家ありがたし  
嬉しさは五本の指が五本あり  
貧しさは鮭一ト切れを奢りとす  
兄弟子の箸を羨むチャンコ鍋  
秋の灯の貧しい膳へ黙りがち

## 鶴 彬（プロレタリア派）

手と足をもいだ丸太にしてかへし  
屍のゐないニュース映画で勇ましい  
一粒も穫れぬに年貢の五割引  
ざん壕で読む妹を賣る手紙  
高粱の実りへ戦車と靴の鋏

# 昭和戦中・戦後の川柳

## 六大家

麻生路郎 尾道市 大阪高商卒 川柳職業人

川上三太郎 東京下町 新しいユーモア復活

村田周魚 東京下谷区 きやり吟社創立 平明

梶本紋太 神戸市 丁稚奉公を経て甘源堂主人

岸本水府 三重県鳥羽 「番傘」を創刊 人気

前田雀郎 宇都宮市 都新聞社の柳壇選者

## 女流作家

麻生葭乃 堺市 プール女学院英語専修科卒

時実新子 岡山市 県立西大寺高校卒 「有夫恋」

― 峯裕見子 ― 穴原明司

六大家 —— 昭和戦中・戦後

(1) 麻生路郎 「川柳雑誌」を主宰

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ  
寝転べば畳一帖ふさぐのみ  
余所の奥さんを鑑賞してるうちに着き  
子を死なし学校に子の多いこと  
振りむけばやっぱりついて来る妻よ

(2) 川上三太郎

良妻で賢母で女史で家にゐず  
お辞儀して返してもらふ貸した金  
孝行は真似でもやはり金が要り  
女の子タオルを絞るように拗ね  
われは一匹狼なれば瘦身なり

(3) 村田周魚

二合では多いと二合飲んで寝る  
神様も笑ふかと聞く子の瞳  
大晦日こんど机をこう置こう  
老いてなお戀知る人の倅せな  
掌の筋に運があるとは面白し



(4) 梶本紋太

大笑いした夜やっぱり一人寝る  
知ってるかあははと手品やめにする  
いう人がいうと人生論になり  
癌の記事いま読んでまだ喫うている  
弔電を打って体操してるわれ  
酒のむも飲まぬも長寿変りなし

(5) 岸本水府

恋せよと薄桃いろの花がさく  
ぬぎすててうちが一番よいといふ  
世話ばかりやいて写真の隅にいる  
景観は雄大にしてバスが落ち  
今にしておもへば母の手内職

(6) 前田雀郎

妻にけなされて本当の値が言えず  
酒飲みに見るにも酒が要り  
日本語で言えぬところが新しい  
これも贗物と遺族へ無慈悲なり  
夢のなか古さと人は老いもせず

## 女流作家

### (1) 麻生葭乃

飲んでほし やめても欲しい酒を注ぎ  
数の子のみんな育てばすごかろう  
浴槽へずらり立ったは皆わが子  
こおろぎよ私も蚊帳で起きている  
墓に水かけに

海越え山を越え

(子の一周忌)

### (2) 時実新子

妻をころしてゆらりゆらりと訪ね来よ  
花火の群れの幾人が死を考える  
死に顔の美しさなど何としよう  
凶暴な愛が欲しいの煙突よ  
自画像を血で描く母を子よいつか  
恋成れり四時には四時の汽車が出る  
投げられた茶碗を拾う私を拾う  
この家の子を生み柱光らせて

## 川柳と俳句

潜在意識の中に川柳は俳句より下位の文芸

俳句↑連歌の発句 (大将の位)

川柳↑連歌の平句 (兵卒の位)

俳句 有 有 文語 風景画

(季語) (切れ字) (語体) (対象)

川柳 無 無 口語 人物画

朝がほやつるべとられてもらひ水

朝顔に釣瓶とられてもらひ水

滝の上に水あらはれて落ちにけり 後藤夜半

なんぼでもあるぞと滝の水は落ち 前田伍健

## 小寺 勇 (俳人)

きまり文句の「ぼちぼちだんな」十二月

熱があるいうたらでぼちんもてくる妻

ショートパンツがようてステテコはなんでやねん

蚊に覚めてほべたでぼちんめくら打

熱いうどんやで呑むうどんやの風邪薬

## 川柳と俳句

潜在意識の中に川柳は俳句より下位の文芸

俳句↑連歌の発句 (大将の位)

川柳↑連歌の平句 (兵卒の位)

俳句 有 有 文語 風景画

(季語) (切れ字) (語体) (対象)

川柳 無 無 口語 人物画

朝がほやつるべとられてもらひ水

朝顔に釣瓶とられてもらひ水

滝の上に水あらはれて落ちにけり 後藤夜半

なんぼでもあるぞと滝の水は落ち 前田伍健

## 小寺 勇 (俳人)

きまり文句の「ぼちぼちだんな」十二月

熱があるいうたらでぼちんもてくる妻

ショートパンツがようてステテコはなんでやねん

蚊に覚めてほべたでぼちんめくら打

熱いうどんやで呑むうどんやの風邪薬

百花繚乱―川柳の復活・庶民化

サラリーマン川柳

シルバー川柳

文芸川柳

女子会川柳

ホームレス川柳

イナカ川柳

(1) サラリーマン川柳

エコ！エコ！と単なるケチを正当化

定年で上司と妻が入れ替わる

耐えてきたそう言う妻に耐えてきた

日は射すが光は射さぬ窓の席

善悪を知らぬ大人が子を育て

このオレにあたたかいは便座だけ

犬はいい崖つぶちでも助けられ

肩書が取れて背中も丸くなり

講演会よく寝た人ほど拍手する

窓際も外から見れば窓の内

(2) シルバー川柳

欲しかった自由と時間持て余す  
お医者様パソコン見ずにオレを診て  
来世も一緒になろうと犬に言い  
あの世ではお友達よと妻が言い  
目も耳も悪くなったが勘は冴え  
美しく老いよと無理なことを言う  
アイドルの還暦を見て老を知る  
どこで見る東京五輪天か地か  
元酒豪今はシラフで千鳥足  
新聞を電車で読むのはオレ一人

【光輝高齢者の独り言】 (高橋様ご提供)

自己紹介趣味と病気をひとつずつ  
クラス会食後は薬の説明会  
飲み代が酒から薬に代わる年  
起きたけど寝るまで特に用もなし  
まだ生きる積りで並ぶ宝くじ  
目ざましのベルはまだかと起きて待つ  
延命は不要と書いて医者通い

(3) 文芸川柳

葬式で会いぼろいことおまへんか 須崎豆秋

生命線だけは易者にほめられる 松原秀河

ええ人ほど早よ死にはるとぼくに言う古下俊作

被害者にくることは無い時効の日 丸山貞春

原子力さて人間よ何処へゆく 高木夢二郎

子の希望聞いてやれない薪を割る 英 城

偉い子はいぬがどの子も親思い 森 紫苑荘

ようきいときや妹ついでに叱られる 西尾 栞

終着駅近付き棚の荷を下ろす 丸山貞春

五月闇痛いところに船が着く 樋口由紀子

両足が濡れないように嘘をつく 樋口由紀子

この墓はいい地下鉄がさわっていく 普川素床

仮想敵僕には左右の手があって 普川素床



まとめー川柳は何を詠んでいるか。

(1)万人の願いを描く。

天下を論じ国家を論じ金が欲し 今川乱魚

(2) 男女の愛を教える。

子を産まぬ約束で逢う雪しきり 森中恵美子

(3) 嘆きを代弁する。

この広い世界に僕の職がない 泉正太郎

(4) 人間の暗部をさらす。

さりながら痴漢の心少し持ち 西尾 栞

(5) 負の心情を詠む。

出世した仲間の話で座が沈み 岩谷政子

(6) 人情の機微をうがつ。

中継ぎも打たれ先発ほつとする 満州生

(7) 批判精神の短詩型

カラフルに国家が来ますピヒツピヒツ 渡邊隆夫

(8) 時代をとらえる。

昔むかし赤紙という人さらい 矢部あき子

(9) 人生とは何かを教える。

台本のない人生がすばらしい 細井辰二

(10) 美しい情感のうた

星空を眺めて妻の馬車を待つ 高階秀峰

## 私の作句指針

笑いは必須、しかし

笑わせる句ではなく

自然に笑いが漏れるような句を

平明

ユーモア

人生

余韻

## 江戸時代の川柳作者

### (1) 松浦静山 (1760～1841)

江戸後期の大名で、松浦壺岐守清。

江戸浅草の藩邸に生まれ、1775 平戸藩主を嗣いだ。退隠後1821以後死ぬまでの二十年間毎晩執筆して「甲子夜話」正統各百巻、第3編78巻を著した。そこに多くの川柳あり。

市迄ハ桶やの家内ちぢこまり

隅田川ありやなしやとふって見る

あきぬのハ続く日和と米の飯

貸したのハねから忘れぬ茗荷売

「川柳派の句は鄙野なれど、世事人情に委曲通貫せるには感嘆せり。」

(2) 葛飾北斎 (1760～1849)

江戸後期の浮世絵師。

狩野派・土佐派の画法を学び、司馬江漢などの洋風銅版画にも関心を寄せた。

「北斎漫画」15編 (1814から刊行)

「富獄三十六景」(1832) は著名。

(64歳～73歳「柳多留」84～125篇に

活躍。約180句収録)

うりすえ

売据のように御寺の煤はらひ

どつちらで年をとろうと渡し守

蜻蛉は石の地蔵に髪を結ひ

灰吹きに烟りの残る暮の客

水加減亭主産所へ聞きに来る

(3) 柳亭種彦 (1783～1842)

本名・高屋知久。禄高二百石の旗本。

草双紙の作者。

「正本製（じょうほんたて）」(1815～1841)

「偽紫田舎源氏」(1829～1842) により

人気作者となる。

「柳多留」の序文を六回書き、しばしば

判者をつとめている。

木卯あるいは柳亭の名で370句が収録されている。四世川柳の狂句時代。

白川の関で捨てたる京扇

其上に針だこもあるいい女房

応拳の幽霊偽筆かと迷つてる

扱さの字おんの音を聞かれて扱さ困り

茶を呑みに下界へ出づる塔大工

